

## 情報共有ファイルを用いた認知症地域連携に関する研究

研究分担者 数井裕光

大阪大学大学院医学系研究科精神医学 講師

### 研究要旨

**研究目的:** 広域地域における認知症地域連携のために情報共有ファイル（つながりノート）を用いた場合の有用性と工夫すべき点を明らかにした。

**研究方法:** 平成 25 年 2 月 1 日より人口 16 万人の兵庫県川西市で情報共有ファイル（つながりノート）事業を全市的に開始した。川西市で在宅生活を送っている要支援 2 以上の人にケアマネジャー（CM）を通して、ノート作成希望者を募った。そして導入前と導入 5 ヶ月後にアンケート調査を行った。

**結果:** 条件を満たす 3073 名の要支援・介護者中、つながりノートの作成を希望した人は 506 名であった。導入時のアンケートに協力してくれたノート使用者 439 名と非希望者 1138 名の比較により、精神行動障害が目立ち、家族の介護負担が重く、連携が比較的好くとれていた患者でノートが導入された。また、精神行動障害が強い患者でノートがよく使用された。家族介護者の 35% がノートの使い方がわかりにくかったと回答したが、連絡会により多く参加しノートの使用法を習得した CM の患者でよく使われた。またかかりつけ医のサイン数が多い患者ほど、連携がよくなった。本事業の効果については、家族の 57% が、今まで以上に皆が一体となって支えてくれると感じた。またそれぞれ 47%、45%、33% の家族が CM、介護スタッフ、かかりつけ医に以前より相談しやすくなったと回答した。

**まとめ:** 広域地域でも情報共有ファイルは有用であるが、使用の頻度は一様ではなかった。効果が得られる人を増やすためには、さらなる使用法の周知が必要であると考えられた。

### 研究協力者氏名・所属施設名及び職名

清水芳郎	大阪大学大学院医学系研究科 精神医学 大学院生
吉山顕次	大阪大学大学院医学系研究科 精神医学 助教
吉田哲彦	大阪大学大学院医学系研究科 精神医学 医員
森上淑美	川西市中央地域包括支援センター 副主幹主任介護支援専門員
藤末洋	川西市医師会 副会長
中村多一	川西市医師会 副会長

### A. 研究目的

広域地域の認知症地域連携のために情報共有ファイルを用いた場合の有用性と工夫すべき点を明らかにした。

### B. 研究方法

平成 25 年 2 月 1 日より人口 16 万人の兵庫県川西市で情報共有ファイル（つながりノート）

事業を開始した。つながりノートとは、患者一人に対して一冊作成し、天寿を全うするまで使用することを想定している。ノートは大きく患者情報をまとめる部分と患者に関わる家族、ケアマネジャー（CM）、ケア職員、医師などが、患者に関する出来事、行った治療、対応、ケア、診療内容などを書きあう部分からなる。お互いに書きあう頁は黄色い紙を使ってすぐにわかるようにした。またこの黄色の頁だけは忙しくても皆が読み、そのときにサインをする規則とした。本事業では、川西市で在宅生活を送っている要支援2以上の人にCMを通して、ノート作成希望者を募った。そして導入前と導入5ヶ月後にアンケート調査を行った。5ヶ月間の事業中、1ヶ月間に4回、場所と曜日、時間をかえて、連絡会を開催した。この連絡会では、つながりノートの使用法、運用法などについて参加者間で提案し合いそれを習得した。

### （倫理面への配慮）

本研究は認知症患者家族、CM、ケア職員などの個人データおよび、アンケート結果を扱うため、個人情報の秘匿には厳重な管理を行うとともに、解析はデータを匿名化した後に行った。

## C. 研究結果

川西市で在宅生活を送っている要支援2以上の条件を満たす人は3073名であった。その中でつながりノートの作成を希望した人は506名であった。導入時のアンケートに協力してくれたノート使用者439名とノートの作成はしなかったがアンケート調査には協力してくれた1138名(対照群)とを比較すると、性別、年齢、要介護度、介護者の年齢には2群間で有意差を認めなかった(表1)。しかしノート使用者の方

が、患者の精神症状が重度で、家族介護者の介護負担度が重く、ノート導入時点での家族から見た連携の円滑さが高かった。

表1 ノート使用者と非希望者との比較

導入前の結果	ノート使用群(N)	対照群(N)	P value
性別(男/女)	143/296 (439)	359/779(1138)	0.69
年齢	82.7±8.2	82.0±9.1	0.15
要介護度	要介護1.7	要介護1.7	0.96
DBD(精神症状) ( /112)	20.6 ± 14.9 (352)	15.1 ± 13.8 (860)	<0.001
ZBI8(介護負担感) ( /32)	10.3 ± 6.8 (352)	8.8 ± 7.5 (862)	0.001
記入者(介護者)年齢	64.6 ± 11.6 (275)	65.1 ± 11.7 (541)	0.51
家族から見た連携の 円滑さ( /12)	6.8 ± 2.5 (352)	6.1 ± 2.9 (860)	<0.001

ノート使用者の中でもノートの使用頻度は一様ではなかった。ノートの使用頻度を表す指標を複数とりあげ(表2の左欄の項目)その指標とCMの連絡会参加回数との相関を調べた。本事業ではCMが連絡会に参加し、本事業内容、およびノートの使用法を習得する。そしてCMが家族、ケアスタッフ、かかりつけ医などにノートの使用法、記載法を指導する仕組みとなっている。そこでCMの連絡会参加回数が多い程、連携が円滑になると考えられた。そして、実際、CMの連絡会参加回数が多い程、ノートの使用頻度が高かった(表2)。

また認知症患者の連携において、最も連携がとりにくいのは医師である。そこで医師が連携に積極的に参加している患者では、患者に関わる人達の間での連携がよりよくなっている可能性がある。そこで医師のサイン数と連携の程度(表3の左の欄の項目)との関連を検討した。その結果、医師のノートのサイン数が多い患者ほど、連携がよくとれていた(表3)。

表2 CM連絡会参加回数と連携程度との関係

	CM連絡会参加回数 (rs, p, (N))
家族が黄頁読む頻度(4段階)	0.18, 0.002 (269)
家族が黄頁書く頻度(4段階)	0.12, 0.04 (273)
家族連絡会参加(4段階)	0.21, 0.001 (260)
使用黄頁数(4段階)	0.18, 0.001 (372)
サ-ビス事業所記入数	0.19, 0.002 (270)
医師のサイン数	0.15, 0.02 (270)
CMが黄頁読む頻度(4段階)	0.15, 0.003 (375)
CMが黄頁書く頻度(4段階)	0.17, 0.001 (375)

表3 医師のノートのサイン数と連携の程度との関係

	医師のノートサイン数 (rs, p, (N))
家族が黄頁読む頻度(4段階)	0.27, <0.001 (294)
家族が黄頁書く頻度(4段階)	0.39, <0.001 (294)
使用黄頁数(4段階)	0.35, <0.001 (291)
CMサイン数(4段階)	0.34, <0.001 (288)
CMが黄頁読む頻度(4段階)	0.31, <0.001 (294)
CMが黄頁書く頻度(4段階)	0.31, <0.001 (294)
CMからみた連携改善度	0.13, 0.028 (291)

さらにノートの使用頻度と患者の精神症状や介護者の介護負担との関連を調べたところ、ノート使用5ヶ月後の精神症状が強い患者ほどノートの使用頻度が高かった(表4)。しかし患者の年齢や要介護度との間には有意な相関は認めなかった。

表4 精神症状とノート使用頻度との関係

(rs, p, N)	介入前 精神 症状	介入後 精神 症状	介入前 介護 負担	介入後 介護 負担
CMが黄頁 読む頻度(4段階)	0.14 0.017 (305)	0.15 0.016 (274)	0.13 0.03 (305)	
CMが黄頁 書く頻度(4段階)		-0.12 0.04 (274)		
使用頁数 (4段階)		0.16 0.008 (271)		

ファイル導入5ヶ月後のアンケート調査の結果、家族(N=236)の35%が「使い方がわかり

にくかった」と回答した。効果としては、家族の57%が「今まで以上に皆が一体となって支えてくれると感じた」、49%が「患者の状態をより客観的に捉えられるようになった」、またそれぞれ47%、45%、33%の家族がCM、介護スタッフ、かかりつけ医に以前より相談しやすくなったと回答した。その他、患者の前では伝えにくい症状を伝えられた、治療方針・症状と薬との関係が明らかになった、複数の介護事業所間の情報共有が円滑になった、家族・介護従事者の介護スキルが上達した、家族の精神安定が得られたなどのコメントが寄せられた。

医師に対するアンケート調査では、黄色い頁を読んだ医師の割合は78%、黄色い頁に書いた医師は57%であった。効果については、日常生活がより具体的にわかるようになった(51%)、家族、CM、ケアスタッフにアドバイスしやすくなった(43%)、医療と介護の連携がよくなった(41%)であった。

#### D. 考察

我々は2011年2月から大阪大学病院の周辺地域で59名の認知症患者を対象に情報共有ファイルを使用し、その有用性を検証した。本研究では人口16万人の川西市という大きなフィールドで情報共有ファイルを使用し、どのような工夫をすればファイルが有効に使用できるかを検討しているところである。

今回の結果では、家族の57%が「今まで以上に皆が一体となって支えてくれると感じ、医師の41%が連携がよくなったと回答している。従って、今回のような大きなフィールドでも連携ファイルは有用と考えられた。

しかし今回のような大きなフィールドでは、全てのノート使用者に一様にノートを使用させ

ることは困難である。必要な人はよく使い、必要性が低い人はあまり使わないのが自然であろう。そこで今回は、どのような人がノートの作成を希望し、実際に使用した際にはどのような人がよく使ったかを明らかにした。その結果、ノート作成希望者は、家族の介護負担が重く、精神行動障害が強い患者であった。さらにノート使用者の中でも、精神行動障害が強い患者に関わる人の間でよく使用された。要介護度とは有意な関連はなかった。以上よりつながりノートは精神行動障害が強い患者に必要とされることが明らかになった。

次にノートが円滑に使用されるためにはCMが連絡会に参加することが必要であった。アンケート調査の結果からもノートの使用法がわからないという家族が35%存在した。すなわちノートは配布するだけでは使えず、使い方を習得することが重要なのである。今回の事業では、全てのCMが十分に連絡会に参加したわけではなかった。従って、ノートの使用法を利用者に十分周知できたわけではない。また黄色いノートに記述した医師の割合は57%であった。医師のサインの数が連携の改善の印象に最も効果的であったことから100%の医師に記述を望みたいところである。今後、CMの連絡会への参加を増やし、かつ医師のノート記載を増やす手立てが必要である。

## E. 結論

人口16万人に対する全市的導入においても情報共有ファイルは有用である。しかし使用の頻度は一様ではなかった。また円滑に使用するための工夫も必要であると考えられた。

## F. 健康危険情報

なし。

## G. 研究発表

### 1. 論文発表

- 1) 数井裕光. 認知症診療における最近の話題-新しい治療薬と地域連携- 大阪府内科医学会誌 22(1): 45-51, 2013
- 2) 数井裕光、武田雅俊. 認知症診療における地域連携クリティカルパス. 日本社会精神医学会雑誌 22(2): 109-115, 2013

### 2. 学会発表

- 1) 数井裕光. みまもり・つながりノート(認知症地域連携クリニカルパス). 2013年精神疾患医療政策フォーラム(プレ発表会)、長野県佐久市、2013.7.10
- 2) 数井裕光. 認知症診療のための地域連携. 日本プライマリ・ケア連合学会第27回近畿地方会、特別講演3、神戸、2013.9.8
- 3) 数井裕光. 認知症診療のための地域連携 - 情報共有ファイルの有用性 - 第3回日本認知症予防学会ランチョンセミナー、新潟、2013.9.27-29.
- 4) 数井裕光. これからの認知症診療と地域連携. 第14回日本クリニカルパス学会学術集会ランチョンセミナー、盛岡、2013.11.1
- 5) 数井裕光. 認知症連携における情報共有ファイルの使用経験 第66回九州精神神経学会・第59回九州精神医療学会ランチョンセミナー 6、鹿児島、2013.11.8

## H. 知的財産権の出願・登録状況

### 1. 特許取得

なし。

## 2. 実用新案登録

なし。

## 3. その他

なし。